前田「火の山」合戦記（平曲の詞）ならびにその成立（承前）

大津不二也

前号の誤植のおわび……「小舟」は「小丹」。P.1の上段の「無理無難題」は「無理難題」。P.3の上段の「思ひ立ので……」は、思ひ立つので……」。P.6の上段の「中帝三条……」は、「中御門三条……」。

（一）の本文は、前号掲載。）

（一）の荒筋をたどってみよう。火の山城主光元は数多の勝れた重臣達を持って旭の昇るような勢いであったが、世嗣が無く、北の方と相談し、苦しい時の神頼みでご利益の深い小倉の彦山権現に祈願をこめようと出掛け、七日のお詣、次いで七日の祈願。満願の宵に老人が現れて、両人とも前世にシナで悪業をなしたので、一子を授けるわけにはいかないと。短気な光元は怒るが、北の方になだめられて、さらに七日の祈願をすると、また例の老人が現れ、両人の心願に免じて火星を授けるが、十七才になると時の帝に弓を引き、お城の滅亡の原因となろうと。しかし、光元は、帝に弓を引く位の者であればあっぱれの勇士であろうし、人は一代でもその名は末代までであろうと喜ぶ。光元・北の方は謝恩のおこもりの七日を了えて帰城する。城内あげて祝いに湧き立つ。その後、北の方は一子春若を生む。春若は大事に育てられ、文武両道を修め、満十四才になると、身長も人より勝れ、しとやかで臣下を愛し、十五才で元服し、春元と改める。

以上のように内容は奇抜で、しかも因果応報や信仰の理念で貫かれている。春元は異常のなかに生れ、異常な運命を背負わせられる。また、光元・北の方が前世はシナで悪業を働いたと言う話は、この地方には古くから他国から渡来した者があったことを想像させる。火星が授けられたと言うことは、火の山が古くは鋒火を上げる山だったことを暗示せしめるようだ。

なお、＜……（光元は）……御座舟にこそはかゝらるる＞、＜……（光元は）……身を震はせていたりける＞、＜……早や七年も移りける＞などのように文の終止すべきところを連体形にしている。これは謡い物として余韻余情を持たせるのかも知れないが、語り物としては終止形で終止してもよさそうに考えられる。このような用例は、（一）～（七）の各所に散見せられる。これは室町時代に有力になっ

た終止形の連体形化すなわち終止形・連体形の同形化の反映で、この物語の成立時を暗示しているようにも考えられる。

また、最後〈△……▽の部分〉に次への展開を予測せしめる語句を掲げて、連続物であることを示している。

表現について言えば、本文を読んでわかるように、語り物や謡い物の例に洩れず、口調のよい常套句で繋ぎ、また七五調を取り、描写に新鮮味は無いが、平俗な語を多用し、文法的破格も多い。しかし、その構想・表現は、まったく大衆的である。これは、㈠～㈦についても同じく言える。

(二)

時津風天の御祓い絶えやらぬ　股肱の臣等一同は　君を守護し奉り　大和の皇居に御参内　新たに下ろす御新造　神風さっと吹き来り　順風にまかして漕ぐ舟は　あたかも矢を射る如くにて　浪華の浦に着きける　小丹の中将春元は　舟を待たせて　臣等をば　左右に従へ大和なる　時の関白広直卿のおん館に着き給ふ

広直卿にも御満足　あっぱれ名城火の山に　末たのもしき御公達　中国一の名守かと　御祝詞ありて広直卿　金の扇のえにしをば　手づから下しおかれける　春元公は畏みて　盛平御前へ進み出で　盛「恐れ乍ら関白殿　若大将　元服の式として　皇居に上洛奉る　願はくば　帝の御機嫌拝し奉り度候ただ願はくば格別の御慈悲を以て　御所へ参内の儀　御取りなし下さるよう　主人光元に代り　陪臣の身を以て　をこがましくは候へど　ひとへに願い奉ると　金子若干差し出し　かしこみ入ること殊勝なり　広直卿にも御承引　関「帝殿にも御満足ならん　当館に滞在ありて　別食水業なし給へ　七日たって参内」と　英傑無双の盛平は　後見として片時も　お側はなれず一心に　七日七夜がその間　業をつくして身を浄め〈〉の部分は、後の△のところに入るものであろう。〈恐れ多くも一天万乗　時の帝は欽明天皇　拝謁尊顔うるはしく〉　広直卿は春元公に　公卿の冠装束を　官位に応じ晴れやかに　玉の御輿に載せ奉り　お側には星野の太郎　禁裡の御殿へ御参内　げにうつしえに隠れなき　美麗をかざる百師百官　しつきんの声諸共に　清涼殿に参らるゝ　正面には御簾を巻かせ　時の帝は△（〉除く。うるはしく）　居並び給ふ方々は右大臣左大臣　内大臣　公卿の方々綺羅をかざり　あたりまばゆき風情なり　広直卿はさはやかに　関「安芸周防長門三国の主弾正光元が子息　小丹の中将春元公　帝へ参内奉る」と　披露の声に右大臣　右「参内の儀過分の至り　帝の御機嫌斜ならず　勅語賜はる筈なるぞ　近う近う」と御意のしたより　春元公静かに座を進め　こうべをたれて御拝謁　大君様にもうるはしく　帝「朕汝を中国の主として愛す　汝世に立ちて　朕を守護せよ」と　恐れ多くも御勅語　ただかしこみの春元公は感涙にむせび給ふ　各大臣より御流れ　下げさせ給ふ　面目は　火の山城にかってなき　栄ゆる春の桜木を　植えし心地の目出度けれ　百師百官始めにて　居並び給ふ御公卿は　一同祝詞をえいじられ　改めて従二位を賜はり　従二位中将春元と

星野の太郎盛平は　従三位を賜はり　名声天下に輝かし
広直卿の御館に　下らせ給ふゆかしさは　広直卿にもおぼえよき　御姫君に玉姫とて　二八の春の紅梅の　香りゆかしき花の実を　大和の国に又となき　古今の美女とかくれなき御姫君は中将に　深く恋ひさせ給ひける　儘ならぬ身の悲しさを　泣いて待つ夜の五月雨の　故郷えにしのほとゝぎす　血を吐く胸はいやまさる　心の中を神かけて　結びの縁を玉草に乱れし筆の一首をば　したため給ひ腰元に　命じて従二位中将の　御許様へ参らせて　ゆかしき返事松ケ枝の　鷹の初音にいやまさり　楽しみ給ふ甲斐もなく　智勇兼備の大将が　いかでか恋に吹く風に　靡かせ給ふようもなく　お側去らずの盛平を　手近く招かせ此の度の　玉草のこと云ひ明かす　春「如何に盛平承はれ　勿体なくも高位の家に生れ乍ら　かゝる仕儀は何ごとぞ　汝よきに取り計らへ　盛「はゝ恐れ乍ら君様に御館へ長居はお恐れ　却って仇にならんより　御帰国あって然るべし　早速用意仕らん」と　広直卿にこのことを　伺ひあれば広直卿　関「名残はつきねど是非も無き　又来る春を楽しまん　それ供の御用意を」（春元公の御家来は（〜の部分は八のあたりに来るのであろう。）君をお迎へ奉る　関白殿の御家来は　浪華の浜へおん名残　総勢合はせて八百有余人）　叶はぬ恋にあこがるゝ　此の身は如何なる不幸ぞと　身をうち伏せて歎き給ふ　いざ出発と聞くより姫君は叶はぬ恋とは思へども　姫「さりとはつれなき春元公　わらはを見限り給ひしか」　果ては堪へかね忍びかね　狂気の如くなり給ふ　腰元共も持て余し　諫めんようもあらざれば　表御殿へこの事を　御披露いたした事なれば　広直卿を初めといたし　臣下の一統眉をひそめ　この事他家へ聞へなば　関白殿の家の恥辱　広直卿には怒らせ給ひ　関「憎つくき姫がしわざかな　公家の家に生れ来て　高の知れたる中国大名　身分の上下も辨へぬ　あのこゝなこな　うろたへ者奴が　娘と思はん親でなし　不孝不義の大罪人　管野弥五郎娘を斬り捨てよ」と　御意が下れば弥五郎は　弥「我が君様には御短慮と申すもの　御心を　しづめさせ給ひ　それがし中将春元に　手段を設け姫君と　婚姻の由申し伝へん　関白殿の姫君なれば彼もいなみは申すまじ」　関「ではその方よきに計らへ」と広直卿は御機嫌損じ　奥殿さして入り給ふ　管野弥五郎取敢へず　後見役の盛平へ　面会いたし此の事を　語りて婚姻とり結ばん　そうじやそうじやと盛平に　御前の御用といつはりて一間の方に招じける　管野弥五郎言葉静かに　管「これはこれは火の山の御家来　奥野の太郎盛平殿　火の山城に幸ひの春を迎へる時節到来と　云ふは別儀あらず　関白殿の姫君御身の御主人春元公へ　御心かけさせ給ひ　某へ取計らへとの御意　火の山城関白殿と　御親戚となるゝ上は　向ふ所に敵はなし　国も富み御家も栄ゆる事　此れに越す事はあるまじ　御承引ありて然るべし　御身は御主人春元公に申し上げ早速御取なし下され」と　関白殿を笠に着て　押しつけ縁談持ち込めば　星野の太郎盛平は　性来短慮の者なれば　怒れる心むらむらと　湧き立つ胸を押ししづめ　事荒ら立てゝは君の

前田「火の山」合戦記（平曲の詞）ならびにその成立（承前）

お為もあしかりなんと　思ふ素振りを表に出さず　盛「仰せご
ともっともなれども　此の場を某が取りなすとは　思ひも寄ら
ず　ひと度故郷火の山に　帰城致して老臣共と　協議の上
あしくは計らひ申すまじ　先づ其まで」と盛平の　理ある言
葉に弥五郎も　たってこうとも言ひかねて　弥「何卒色よき返
事をば　楽しみ待つでござろう」と　悦び勇み弥五郎は　奥
殿指して入りける　御姫君に此の事を　申し上げたる事なれ
ば　狂気の夢も覚め果てゝ　おもはぢ乍ら我が胸を　推察し
やとばかりにて　涙にこそは暮れ給ふ　弥「色よき返事は遠か
らず　拙者が御聞かせ申すべし」　姫君様は勇み立ち　姫「只
その日をば楽しみに　相待つべし」とのたまへば　管野弥五郎
此の事を　広直卿にも申し上げ　〈火の山城に婚姻の　時期
を図らせ給ふこそ　そも合戦の初めなり〉
　〈春元公には供揃ひ　星野の太郎盛平は　管野の言葉をていよ
く外し　後見役の勇に　騏麟の身を身に負ひて　御座舟に移
らせ給ふ　程なく前田の浜に着き　津々浦々を夢に越し　舟
中無事に恙なく　着かせ給ひし事なれば　城内よりは数多の
武士　皆めいめいに御出迎え　君の祝詞も千代八千代　火の
山城の万才を　祝し参らせ一同が　行列りゝしく御帰城の
春元公にもお久方　二親様にも御対顔　弾正公にも御蔭にも
和子が大和の参内の　覚え目出度く従二位まで　登りし官位の
目出度さは　雲井に竜ののる如く　あるが中にも此処に又
星野の太郎は大和路に　有りし次第を物語り　只気づかはしき
は此の度の　関白殿の御婚姻　若し広直に邪智あらば　人質
のため姫を送り　親戚縁者の交はりは　油断をうかがふ種なら
ん　秘かに同志を語らひて　攻めかゝらんも図り難し　さり
とていなめば火の山の　お家にとりてゆゝしき大事　老臣一統
集まりて　協議をこらすばつかりで　〈どうせ一度は火の山に
かゝる大事がさし起こり　関白殿を向ふに立て　無理矢理でも
朝敵の　汚名を蒙り飽くとも　従二位中将春元が　都の方
へ攻め上り　ひと合戦と云うような　いよゝ火の山合戦の
大眼目のひと巻は　追々後と知られたり〉

　㈡の荒筋をたどってみよう。春元の元服祝いに、重臣達は春元君を守護して大和の朝廷へ参内するため、新しい船を浮べ、順風に乗って、浪華の浦に着く。春元は船を待機させて、左右に臣下を従えて時の関白広直卿の邸宅に着く。関白は、春元を末頼もしい御公達として満足に思い、お祝いの言葉を述べ、金の扇を授ける。春元は畏み、臣盛平が御前へ進み出、金子若干を差し出し、春元公が元服の挨拶に上京したので、時の帝に拝謁の取り計らいを頼むと、関白もそれを引き受け、拝謁の前に当家に滞在して七日の別食水業せよとのことである。英傑無双の盛平は、後見役として春元公のそばを離れず、七日七夜勤めに身を浄める。関白は春元に公卿の冠装束その他も官位に応じて晴やかにし、春元公を輿に乗せ、おそばに臣盛平を従えて参内し、清涼殿で二十九代欽明帝に拝謁し、「汝を中国の主として愛す、汝世に立ちて朕を守護せよ」のお言葉があり、春元に従二位、臣盛平に従三位を賜はり、一面目を施す。関白邸に帰ると関白の寵愛している玉姫（二八の紅梅の、大和の国に又となき、

古今の美女とかくれなき）が、春元に深く恋い、恋文を腰元に托して送り、その返事を待つが、その甲斐も無い。春元公は、側近の盛平にこのことを打明け、その取り計らいを頼む。盛平はこのことを聞き、浪華滞在の不可を思い、急に帰国を思い立つ。（〔〕の部分は、入れ違って前に入ったものだろう。）これを聞りを惜しみ、臣下たちに命じて浪華の浦まで送らせる。）これを聞いた玉姫は狂気の如くなる。関白を初めとして臣下たち一同は、これが他家へ聞えたならばと心配し、関白は家門の恥辱と怒り、側近の管野弥五郎に娘を斬り捨てることを命ずるが、管野は関白をなだめ、春元との婚姻の取り計らいを引き請ける。管野は御用にかこつけて春元公の後見役盛平を一間に召して頼む。生来短慮の盛平は、この関白を笠に着きての押し縁談に対して内心では怒るが、それを抑えて一度帰国し老臣共と協議の上、悪くは取り計らい申すまいと言い逃れる。管野は、関白や玉姫にこのことを話す。前の（　）の部分はこゝに入る。盛平は、春元公を御座舟に乗せて、早々に浪華の浦を立ち、前田の浜に帰り着く。春元公は、久し振りに両親に会われ、帝のご寵愛も深く従二位を戴き非常な勢である。このなかにも、盛平は大和であったことを思い、もし関白が姫を人質に送り、親戚・縁者の関係を結んで油断をうかがって攻めて来るのではなかろうか、しかし断われば火の山のお家にとって一大事になろうと思い、老臣たちに計るが、名案もなく協議に時を費すばかりである。

この部分には、本文の右に付記したように入れ違いがあるようだ。これも、語り物としての口調のよい語調が作り出す情緒に聴衆は意に介しなかったのかも知れない。

前田「火の山」合戦記（平曲の詞）ならびにその成立（承前）

なお、途中と最後に次の㈢への展開を予測せしめる語句（〈……〉）の部分を二か所に設けた処など、㈠の作者と違うのではあるまいか。表現は㈠と同じく平明であり、口調を整えるに腐心しており、一般受けをねらっている。

（三）

〈白妙の優しき雪は肌をさく　幸ひ転じて仇となる　有為転変の世の中に　小丹の中将春元は　従二位の官に任ぜられ飛ぶ鳥落す火の山の　栄華の夢もしばしにて　此処に起きたる騒動は　神の御告げの如くにて　時の帝に引く弓の　味気なき世と変り行く〉　星野の太郎盛平は　老臣一統御前へ集め　こたび大和の出来事を　つぶさに語り　盛「諸士一統御意見いかがに」と見渡せば　忠臣の諸士一統は　互に顔を見合はせて水を打ったる如くなり　勝山弾正倉之助　恐れ気もなく進み出で　勝「盛平殿に我先に　をこがましくは候へど　佞奸邪智ある広直が　娘如何に関白なればとて　火の山城に婚姻なぞとは　以ての外　此の弾正は不服でござる」と　あたり見廻す事なれば　吉田よーご（彫迎）ー為氏も　我も同意と述べ立つる　人の心は一様に　善悪二つに限るなり　忠臣勇士の者どもに　如何に違反のあるべきぞ　一同異義を述べ立つる　星野太郎聞き終り　盛「いつも乍ら頼もしき　諸士一統の御忠義其れにつけても火の山は　日本全国を引き受けて　如何なる戦ひ致すとも　少しも恐る事はない　かくなる上は若君に

覚え目出度き御台をば　めとらんものと誰彼と　選ぶうちにも
盛「此処に又　備前備中両国を　堅めて岡山城内に　なの
らせ給ふ大将は　望山正司直行が　独り娘の花園前とて　三
五の花も綻びの　色に稀なる美人とて　大和心を其のまゝに
写る鏡ももろこしの　身は楊貴妃に劣らざる　美人の噂隠
れなき　此の姫君を火の山へ　申し請けなば中国に　誰れ恐
ろしき名もなし　如何に関白広直が　弓矢を以て向ふとも
両家が心を合はせなば　大盤石の如くなり　此の儀如何」と盛
平が心をこめし一言に　勝山弾正を始めと致し　皆一同勇み立
ち　一同「星野の太郎盛平殿　御使者は其処もとが」　盛「委
細承知」と盛平が　供の用意も充分に　君のおためになるなれ
ば　命惜しまぬますらをが　腕には百千倍力の　力を備へし
人なれば　飛ぶ鳥落す勢に　行列威儀を正さして　道中無事
に岡山の　城の御門に着き給ふ
威勢も猛く触れ込めば　岡山城の　家老　羽柴右京之助高久
は　火の山城主とは　願ふ事なき御家の面目　此れに過ぎず
過ちありては一大事と　衣紋正して出で迎ふ　星野の太郎盛平
は　其の身は大紋立烏帽子　並み入る岡山諸家中を　眼下に
見下し悠然と　二の丸指して押し通れば　虎の皮のしとねを敷
かせ　形を正し粛然と　供のめいめい左右に居並び　綺羅を
飾りて控へしは　流石天下に隠れなき　威勢輝く火の山の
諸士も見事と岡山の　羽柴右京之助は　末席に　両手をつか
へ　羽「火の山よりの使のお役　御遠路の処御
苦労千万　身不肖なれど　当家の家老羽柴右京之助　使者の
越を承はらん」と　申し上げれば盛平は　盛「御叮重
なる御計らひ　かく申す某は　火の山の執権星野の太郎　盛
平と申す者今回の使者　余の儀にあらず　御当家秘蔵の御姫君
火の山に申し請け度く　罷り越したる次第に候　右京之助殿
よしなに御取り成しに預り度し」と　申し上げたる事なれば
遂一聞いたる右京之助　口には云はねど胸のうち　数多大名あ
る中に　当時天下に隠れなき　名家名城火の山の　若君中将春
元公は　都へ上洛遊ばして　従二位の官に任ぜられ　其の名
は四方に聞えたる　其の若君に姫君が　御婚姻遊ばさば　唯
何事も火の山と　心を合はせ計りなば　六十余州に何のその
恐るゝ敵もあるまじく　命に代へても高久が　取りなしせいで
置くべきかと　心を定めて御使者に向ひ　羽「委細承知仕る
身不肖ながら　高久が命に代へても御婚姻　請け合ひ申す」
と其の場を下がり　君の御前に罷り出で　火の山よりの使の段
々、申し上げたる事なれば　御殿望山正司は聞こし召され
望山「右京よきに取計らへ」と　御意の下より右京之助　羽「
はは―君の思召し　如何と思へども　火の山城に御姫君　御
婚礼ましまさば　当家のおため此れに過ぎず」と　申し上げれ
ば殿様は望「姫にも語り聞かせん」と　奥殿指して入り給ふ
局頭の言の葉を　招かせ給ひ此の事　御意遊ばした事なれ
ば　局言の葉かしこまり　局「委細の旨を姫君に　御勧め申
し参らせん　暫時御猶余下さるべし　色よき御返事御聞かせ申
す」と　仲婦言の葉姫君の　御居間を指して伺い　御殿様の上
意をば　其のまゝ申し上げ　御勧め申した事なれば　如何なる

縁か姫君は　火の山城と聞くからは　心の中に勇め立ち　姫
「父上の思召し　背かば不幸　言の葉」と　色よき返事聞き
及び　局「姫君様　左様でござらば殿様に　わらはの忠義も
立つ道理　許させ給へ」と座を立ちて　君へ言上奉る　此処
に良縁まとまりて　羽柴右京も盛平も　共に悦び御進物　火
の山城より送られて　此処に御婚姻まとまりて　両家の安泰治
まりて　望山正司は花園前に　別れる事の哀れさを　絵姿な
りと残さんと扇に写す花園の　容貌紛ふ方もなく
　画像に名を得し望山が　其の年都へ上洛　此処に関白広直卿
今日は火の山中将の　御使者が来るかと待つ甲斐も　噂を聞け
ば望山が　姫と婚姻致せし由承り　〈おのれ憎つくき小舟の中
将　此の恨みをば晴らさんと　手段を以て広直が　時の帝を
取り入れて　無理が矢理でも火の山と　ひと合戦に及ばんと
思ひ立つのでさあ此れから　どうでも火の山城内が　さざめき
渡ると云ふような　愉快は後と知られたり〉

㈢の荒筋をみてみよう。盛平は老臣一同に意見を求めるが、皆口を緘している。そこへ、勝山弾正倉之助が恐れ気も無く玉姫との婚姻に反対を述べると、吉田よーご一為氏（㈠の吉田影迎為氏、この表記やその他から考えると、この部分は㈠と作者が違うのではあるまいか。）も、これに賛意を表する。盛平が、火の山は日本全国を引き受けて戦っても恐れることはない、この上は春元君に評判の高い御台をお迎えしようと、あれこれ候補者を選ぶうちに、盛平が、備前備中両国を支配している岡山城の大将望山正司直行の独り娘花園前（三五の花も綻びの、色に稀なる美人とて、大和心を其のまゝに、写る鏡ももろこしの、身は楊貴妃に劣らざる、美人の噂隠れなき）を挙げ、この方を火の山に申し請けるならば中国にだれも恐ろしいものはなく両家が心を合わせるならば関白が攻めても大丈夫であると言うと、勝山弾正を初めとし一同勇み立ち、盛平がその使に立つことになる。盛平が岡山城へ行くと、家老羽柴右京之助が鄭重に迎える。盛平が姫君を若君に申請けたいと願うと、羽柴は心のなかで天下に知れ渡った名城火の山と縁組みをするならば六十余州に恐るゝ敵は無いと思い、申し出を請け合い、主君望山の所へ行って勧める。望山は局頭の言の葉をして娘の心をうかがわせる。姫は父上の思召しに背くならば不孝と言い、これを承け入れ、こゝに良縁がまとまる。望山は独り娘と別れるのを惜しみ、絵の名手である望山は、せめてその絵姿でも残しておこうと扇に描く。その年、望山は上京する。関白方では、今にも火の山の使者が来るかと待つが、その甲斐も無い。噂に聞くと、望山の独り娘と婚姻したとのことで関白は憎い小舟の中将春元に恨みを晴らそうとする。

　この㈢は、本文の通り㈠・㈡と構成が多少変わり、冒頭と最後に㈣以下への展開を予測させる語句（〈……〉の部分）を掲げている。なお、表記の「吉田よーご一」は、㈠や㈣の表記と違い「白妙……変り行く」や「人の心は……限るなり」の叙述を入れている。これらから考えると、㈠・㈡の作者と違うのではあるまいか。

（四）

前田「火の山」合戦記（平曲の詞）ならびにその成立（承前）

写し絵に　変り行くは悲しけれ　流石名城火の山も　光元公は神去り給ひ　御台様にも過ぎさせ給ふ　不幸重なる火の山も　中将公を始めとし　臣等一統集りて　仏事供養もねんごろに　孝道無類の春元は　昧気なき日を送らるゝ　其れは捨て置き此処に又　望山正司は何気なく　関白殿の御館に　娘の姿写したる　肌身離さぬ扇をば　館に忘れ参らせる　関白殿の臣等のもの　何心なく拾ひ取り　流石画像に名を得たる望山正司がかきし姿　絵空ごととは云ひ乍ら　其の面影を現在に　生きたる人のある如く　臣「あゝ美しき此の絵かな　関白殿へ御目見えん」と　扇をしめし参らせば　望山正司を館へ召され　関白殿は正司に向ひ　関「如何に望山承れ　今日臣等の者共が　拾ひ来たりし此の扇　写る姿は楊貴妃なるか」　望「御意に候　此の姿こそ前田火の山に遣はせし　花園と申して不束な　磨が乙女に候」と　申し上ぐれば広直卿　暫時扇は預ると　心よからぬ者なれば　すぐに禁裏へ参内し　帝の拝謁伺ひて　扇にありし絵姿を　帝へ示し参らせる　帝はしばし愛翫ありて　帝「あゝ神なるか　人なるか　人なれば朕が妃に愛せん」と　思はず勅語ありければ　仕済ましたる広直が　娘の恋の意趣晴し　火の山城を朝敵に　致すは此処と様々に　ざん言致し　火の山は　分に過ぎたる致し方　かゝる美人を春元に　かしづけるとは言語道断　此れ此のまゝに捨て置きなば　貴賤の御威勢にも拘はる事　ねがはくはみことのりを下し給へ　火の山城を唯一戦に　蹴散らし　花園前を御当所の　妃に加へ奉るべし」　帝「朕汝にみことのりを下す　使者の役目は中御門　三条前の中納言　当時老体の身ながら　才智にたけしものなれば彼を手先に使はんと　禁裏をさがり広直が　三条前の中納言屋敷へ召して意中を明かし　関「今回火の山の使者として　御身の外に誰として　頼まん人もなかりける　此れより前田へ下向なし　使者の口上かくかく」と

上意を受けて中納言　前田へ下向行列も　御勅使とてはでやかに　尼ケ崎より御座船を　早や海上に進め給へば　程もなく須磨や明石の浦々を　過ぎて矢を射る如く漕ぐ舟は　二十八里の播磨灘　見ゆる向ふは四国路や　堅い約束石槌や　今はるばると厳島　安芸の国さへ程過ぎて　三十六里の周防灘

船中無事に火の山の　固めと致す前田浜　勅使の御旗輝かすゆゝしき大事と城内は　俄に湧き立つ如くなり　出迎の役は星野の太郎　供揃ひにて勅使をば　かしこみ迎へ奉る　此処は城内二の丸の　広間の方へと誘ひて　豹の皮のしとねを設け　勅使の御役中納言　其の他御供一同は　威儀を正して連り給ふ　流石都に北面の　従光輝く有様は　秋の夜空に異らず　星野の太郎盛平は　正三位の御装束　中納言に一礼なし身は　従三位中将春元が臣　星野の太郎盛平なり　勅命の儀のたまへと　云ふ間もあらせず中納言　中納言「勅命かしこみ承れ火の山城の形勢は　分に過ぎたる致し方　其れにつき難題を申渡す　芥子種千石　あく縄千把　黒胡麻千石　帝へ献上奉れ　さなくば御台花園殿　三十年が其の間　禁裏の勤め致すよう　協議を定めて返答せよ」と　思ひがけなき御難題　鬼

とも似合ふ盛平も　暫し言葉もなかりける　老臣共に評議の間
御傍へ臣下を残し置き　君の御前へ盛平が　足の運びもたどた
どと　罷り通れば御そばには　勝山弾正吉田影迎　青山太郎
内藤左内　信太の次郎を始めとし　居並ぶ諸士の方々は　勅
命案じてゐたりける　星野太郎席に座し　星野「方々御存じの通り
時ならぬ勅使　気遣かはしく存候処　もっての外の御難題
かようかよう」と勅命を　落ちなく御披露致すなら　臣等一統
余りの事に呆きれ果てたる風情なり　中将公は聞召し　春「味
気なき浮世かな　かくまで築きし名城さへ　滅亡の時節到来
やよ臣等の者　例へ滅亡致さばとて　花園前を如何にして
禁裏の勤めなさしめん　此れにつけても思ひ出すは　都上洛の
其の時　玉姫が恋慕の事　其の際太郎盛平が　体よくなし帰
城の後　花園殿をめとりしを　関白広直　我を恨み　手段
を以て火の山を　落さんとする奇怪千万　なれど帝の勅命を
表に飾る中納言　追ひ返す事心苦し　其の難題を献上すれば
分に過ぎるとは申されまい　国内に沙汰致せ」　げにすくやか
な御仰せ　無念乍ら諸家中は　其れ其れ一統国内に　あく縄
芥子種黒胡麻を　其れ相当に納むれば　満三年は無年貢と
慈悲ある達しに一般の　農民共は勇み立ち　農夫「なんと田吾作
甚左ヱ門　御上の達しを聞いたかい　此の度天子様からおしや
くし　ちふものが　立つたげなちやないか　ごっぽーもない
事を云ふない　馬鹿云ふない　目の玉と金だまほど　違ふわ
い　まあそいつが抜かす事にやな　芥子種とあく縄と黒胡麻を
納めいとか　云ふようぢや　納めたものは　三年の作りどり
と　いつも乍らの御仁心　行こうぢやないか」と一同が　一同「
古屋新宅新し屋　本家も部屋も皆来い」と　今も変らぬ農民の
分　相当に納むれば　あく縄二千把　芥子種二千石　黒胡
麻一千五百石　納まる事のゆかしさに　農民共は口々に　罵
る声　農民「あれ程のものを　何の葉になさるやら　あれで病
気が癒るなら　医者も按摩の呪ひも　要らぬものぢや」と取り
どりに噂致して立帰る
皆品々も整へば　星野の太郎は御使者に向ひ　盛「帝よりの
御難題　整ひ候　御検分あって然るよう」と　申し上ぐれば
使者の役　三条公は肝を潰し　三条「聞きしに勝る火の山は
高大無辺の致し方　どれ検分」と立出で給ふ　数多勇士は付添
ひて　「御疑ひも候へば　数あらためて御渡し申す」　俵に入
れし品々を　手掬の如く扱ひて　「受取りあれ」と差出せばさ
しもに前の中納言　中納言「許し給へ」と御殿に帰り　中納言「運ばん
ようもあらざれば　ひと度大和へ帰国の上　用意を致す下向の
間　当城内に預り給へ　先づお暇」と中納言　長居は無用と
臣等を従へ　逃げるが如く退城す　火の山武士は其れを見て
武士たち「虎の威を借る狐武士　おかしき事と指さして　あざけり
笑ふも道理なれ　斯くて三条中納言　青息吐息つき流し　あ
な恐ろしき火の山の威勢　再び勅使に参りなば　無事に帰さん
用もあるまじ　広直卿に申し上げ　後の手段の兎や角と　船
中ろくに寝もやらず　臣等の者も顔色変じ　跡より火の山城内
の　武士追ひ来たりなば如何にせん　とどろく胸を燃しつゝ
夜を日に次いで尼ケ崎　早速大和に馳せ帰り　三条前の中納言

関白殿へ御目通り　ありし次第を落ちもなく　語りて其の身の
恐ろしさ　命を縮む思ひをば　遂一聞いて広直は　関白「やー
小ざかしや中将春元　難題の品々を　集めし事は火の山の
威勢でなくては叶はぬ処　申し立てたは身の誤り　世になきも
のを所望せば　如何に名家火の山でも　竜宮界にあらざれば
世になきものを得る事難し　加藤の兵部忠澄を　第二の勅使に
差し向ける　都に稀なる英傑無双　如何に火の山城なりとて
天魔鬼神の棲家(すみ)にあらず　勅使に向ける刃はあるまい　今度の
難題火の山が　名城たりとも相叶ふまじ　面白し面白しと
悪事一味の忠澄が　第二の勅使火の山に　立つばかりで〳〵さあ
此れから　如何なる難題がかゝるか　火の山城の大忠臣　漸
く当年十七の　信太の次郎の光直が　忠義のために身を捨てゝ
荒行致して神明の　利益を蒙り御勅使の　加藤の次郎忠澄と
対決致した其の末は　首筋摑(つか)んで都へ登り　時の関白広直卿を
向うに立てゝ光直が　命にかけて対決を　しようと云ふあま騒
動は　公家と武士との意気地立も　矢弾を飛ばししのぎを削る
騒動は後と知られたり〳〵（未完）